

Five landmarks for the Future

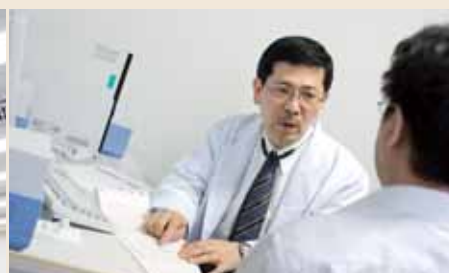
Bio-Sがスタートして4年。

さまざまな研究が進行するなかで、それらの研究のランドマークとなる拠点が各地に誕生しました。

なかでもここで紹介する5つの拠点は、実際の現場においてすでに重要な役割を担い、

その存在価値が認められている先駆的な事例といえます。

これらの拠点の役割は今後さらに重要性を増し、私たちの未来に大きな希望を示してくれるものと期待されています。



上 ヒト介入試験は、医師の指導のもと安全に行なわれる
下 地域住民の理解を得るための講演会やセミナーも頻繁に開催



LANDMARK

01

健康情報科学研究センター

江別市西野幌59番2 北海道情報大学内

基盤となった研究テーマ

機能性食品開発のための基盤整備

北海道情報大学医療情報学科 教授 西平 順 Jun NISHIHIRA, MD, Ph.D.

科学的根拠として
信頼される正確な試験結果。
食品のヒト介入試験は
機能性食品開発に
新たな道を拓いています。

江別モデルの取り組みが 結集された拠点

食の臨床研究を共通基盤事業として立ち上げたBio-S。健康情報科学研究センターは、そのモデル地域として、早期から西平教授がヒト介入試験の実施の仕組み作りに取り組んできた江別市に開設されました。市内の大学、病院、公的研究機関と連携し、また、地域住民のボランティアによる協力も得て、機能性食品開発に向けたヒトでの臨床試験を効率的に行うシステムが稼働しています。ボランティアの個人情報や臨床データの管理システムの構築も完了し、50名程度の中規模臨床試験の実施体制がすでに整った同センターは、道内外からの幅広いニーズに対応する拠点としてさらに期待されています。

企業からの受託による 具体的な試験結果も提供

これまでの実績としては、抗酸化作用以外にも腹部肥満の改善効果が期待されるポリフェノールの効果を検討する試験において、同センターのヒト介入試験が大きな成果を挙げています。具体的な事例としては、腸管からの吸収率を高めた低分子ポリフェノール「オリゴノール」(株式会社アミノアップ化学)や、小豆種皮から抽出したポリフェノールから低GI食品の開発を目指した「小豆スイーツ」(田中製餡株式会社)など企業との連携も進んでおり、薬事法上、有効性を表示できない機能性食品においても、科学的根拠を示す手段となるヒト介入試験の意義はさらに大きくなるものと注目されています。